

喜勝印刷本社裏山に花柚子を植林

福島県の食品会社再建に一役

喜勝印刷^株(安佐南区伴南二丁目五―五、久保知久社長)は、本社裏に所有する山林に「花柚子」を植え付け、写真、福島



県の食品会社の再建を支援する。久保社長が東京で係わった様々な「縁」をつなげて復興支援の一環となる事業に携わる。

久保社長は東京で、喜勝印刷とは資本関係のないグループ会社の取締役として数十社の経営に携わっている。「銀座みもざ館」を運営する^株シーナインコンフエクシヨナリ(新宿区、岡崎慎二社長)もその一つで、同館は全国の百貨店催事やインターネットでスイーツを販売し人気を博している。その人気商品に、銀嶺食品工業^株(福島県福島市)が製造するカステラ状の花柚子ケーキ「柚子の故里(さと)」

があつた。広島のもみじ饅頭を想起するポピュラーな商品だったが、先の東日本大震災でケーキの材料となる「花柚子」の供給がストップ。生産不能に陥ったことで事業継続の意欲も薄れていたという。そこで「昭和二十八年創業の老舗を震災の影響で廃業させてはならない」と、岡崎社長と久保社長に金融システム開発^株エー・ソリューションズ(新宿区)の荒木幸男社長が加わり、銀嶺食品工業の再建に取り組んだ。

銀座みもざ館で販売するすべてのスイーツを銀嶺食品工業の商品に切り替え、花柚子の生産地を久保社長が買って出た。約三三〇〇平方メートルの裏山を今年四月から整備し、五百本の花柚子の苗木を植えた。山林整備、植林には同社社員有志と、ヤマノイ^株(西区庚午北)の山野井重典社長、^株イシバシ(安佐南区川内)の石橋良修常務が協力した。山林整備の際、伐採した木

はペレット状に加工。燃やしたその灰は再び山林に撒く。「紙を使う企業として山を育てるのは本来の姿」(久保社長)と循環型を追求する。

花柚子の生産や食品加工・製造を専門とする「西日本三光共同農園^株」(山口県光市)を五月二十九日付で設立。岡崎氏が社長、久保氏、荒木氏、山野井氏が取締役就任した。花柚子は合計千本を植え、約一五トの収穫を目指す。久保社長は「多くの仲間が繋がったことで被災地の企業を再建できる。募金だけじゃなく被災者が生活できる状態を考える経営者ならではの支援法を学習できた。仲間も随時募集している」と言う。